





5085
2

如ん



玄祐よきとひりしとけみどめ
まゝせしむるはとていふは
あちのふしむるはとていふは
おのれはとていふはとていふは
おのれはとていふはとていふは
おのれはとていふはとていふは
おのれはとていふはとていふは
おのれはとていふはとていふは
おのれはとていふはとていふは
おのれはとていふはとていふは

昭和51年10月13日
久保田好雄氏
贈

51 4651

うせよせり

社の門とほはひえはせられあを

初はくしあひのあひのあひ

あつきのあひ

うしつきのあひ

あつきのあひ

あつきのあひ

あつきのあひ

あつきのあひ

二位の申おき

あつきのあひ

あつきのあひ

あつきのあひ

あつきのあひ

あつきのあひ

あつきのあひ

あつきのあひ

あつきのあひ

あつきのあひ

あつきのあひ

女とわさぶにしくをよめしむるの
御しとくふいりくの御とく
さあゆむるの御とく
らさるの御とく
もさるの御とく
きしとく御とく
してとく御とく
柳のいとく御とく
もさるの御とく
ととく御とく

女もさる御とく
御とく御とく
しとく御とく
らさるの御とく
もさるの御とく
きしとく御とく
してとく御とく
柳のいとく御とく
もさるの御とく
ととく御とく

百首



一
 とすべし...
 ちをせ給ひ...
 をま...
 とす...
 け...
 よ...
 の...
 り...
 あ...
 結と...





一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

夜と申ねるにいらん風のたゞりも
がれと嬉まよひとちんとのまじり
ほしに神仏もあつたに何れも
風の吹あけをうみとのひまわり
らんじきれにびりきよはるあ
せうあひより夜も静あまよ
しららに海よりうはくし
さかぬのふんのかさふんたるの
こころもいれよいらして海より
なごころも静あまよはるあ

そしてまはりびりきよはるあ
物の移とまよひとちんとのま
静あまよひのいせんちんたる
しららに海よりうはくし
さかぬのふんのかさふんたる
こころもいれよいらして海より
なごころも静あまよはるあ
けらちあまよひのいせんちん
たるとまよひのいせんちん

をくへしむしめし人まはしつては
 姫君の御ちかひの御入しては
 ひろきんも中おちの御つと
 しづきんも中おちの御つと
 むしづきんも中おちの御つと
 あつては御入とあらん
 むしづきんも中おちの御つと
 ひろきんも中おちの御つと
 しづきんも中おちの御つと
 むしづきんも中おちの御つと
 あつては御入とあらん

いまは御入とあらん
 夜中おちの御つと
 むしづきんも中おちの御つと
 ひろきんも中おちの御つと
 しづきんも中おちの御つと
 むしづきんも中おちの御つと
 あつては御入とあらん
 ひろきんも中おちの御つと
 しづきんも中おちの御つと
 むしづきんも中おちの御つと
 あつては御入とあらん

ふとては書かぬとてはりてはるるるるるる
あわれんくもてはるるるるるる
しるるるるるるるるるるるる
けり其時文正公の書に
これ西ののいふ
れあはるるるるるる
かたはるるるるるる
とてはるるるるるる
しるるるるるるる
あはるるるるるる

うもてはるるるるるる
しるるるるるるる
とてはるるるるるる
いあはるるるるるる
年百年とてはるるるる
あはるるるるるる
しるるるるるるる
とてはるるるるるる
せよとてはるるるるるる
しるるるるるるる

はるかにさかすかしたるをばかしくし
事にしてさかすかしたるをばかしくし
葉もたかくまひ文正とてしけ
るは梅もさかすかしたるをばかしくし
さかすかしたるをばかしくし
の由子よ二枝の中おかしとてし
らせはさかすかしたるをばかしくし
あさしはさかすかしたるをばかしくし
うけのさかすかしたるをばかしくし
はさかすかしたるをばかしくし

かきゆあはれはさかすかしたるをばかしく
さかすかしたるをばかしくし
梅もさかすかしたるをばかしくし
てはさかすかしたるをばかしくし
あさしはさかすかしたるをばかしくし
てさかすかしたるをばかしくし
あさしはさかすかしたるをばかしくし

由子よ一天下の由子の
はさかすかしたるをばかしくし



なり其の國中は大き小者のこらなり
く出候なりかきめてくれ文正に
とらる屋敷のなりなりも
てんらる屋敷のなりなりも
なりこらるのなりなりも
け屋敷のなりなりも
るせはる文正のなりなりも
とらるなりなりも
くれ中なりなりも
とらるなりなりも

とらるなりなりも
らるなりなりも
屋敷のなりなりも
とも先程のなりなりも
らるなりなりも
とらるなりなりも
けらるなりなりも
今にしてなりなりも
中へなりなりも

にぎりね非名のふらぬふらぬの
うらぬあふらぬのららぬれぬお
のらぬあふらぬのららぬれぬお
とらぬあふらぬのららぬれぬお
くはらぬあふらぬのららぬれぬお
うらぬあふらぬのららぬれぬお
とらぬあふらぬのららぬれぬお
天下の政前入りぬらぬれぬお
とらぬあふらぬのららぬれぬお
うらぬあふらぬのららぬれぬお
とらぬあふらぬのららぬれぬお

と林の月をさびらぬらぬれぬお
はのうぬあふらぬのららぬれぬお
うらぬあふらぬのららぬれぬお
のらぬあふらぬのららぬれぬお
まらぬあふらぬのららぬれぬお
とらぬあふらぬのららぬれぬお
まらぬあふらぬのららぬれぬお
とらぬあふらぬのららぬれぬお
まらぬあふらぬのららぬれぬお
とらぬあふらぬのららぬれぬお
まらぬあふらぬのららぬれぬお
とらぬあふらぬのららぬれぬお

ふんじをくくもあな一中ねの
心のうちとくくくくくくくくくく
のほひけつ天下治きつこくくく
いづらういぢれ地ならももたこ
けりい我子の心はくくくくく
うれくれとああうりりりりり
くくくくくくくくくくくくく
ちりぬの廻司とくくくくくく
めもくわさな飲のそくくくく
あともくくくくくくくくく

のくくくくくくくくくくく
てくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
ねまのぶくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
てくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく



しほりたりとてあらの事とも
 しいせのくごぬんはよあはしきし
 事たりりたるはよりしきし
 いしとともめさんとしてどんと
 ぐさるれろ文正しはたてりけ
 ぬくあゆとくちちのものが
 きつてきせひひらとて
 してひひれはひしうとて
 ぬくちちくさあゆのひひも
 しししししししし

ふふとよからたましくから海に花
とられ西にみはせよとくは
今のはせられれなくもせん
よあはしてさうらうたよ
のうせよのせんくからされ
ちんあたとりぬれぬと
くばして文七十一よせい
の中ねよさうらうたぬれぬ
りくとねえぬはれぬと
こののぬりかえさんのあよよ

そしてさうらうたぬれぬ
くから西に西にぬれぬ
てさうらうたぬれぬ
くよあはしてさうらうた
そしてさうらうたぬれぬ
ぬれぬ西にぬれぬ
せぬぬ西にぬれぬ
西にぬれぬ西にぬれぬ
くもさうらうたぬれぬ

ひも大らんよのまをていよ
のよとこもいよまをていよ
てがちのよをていよと
いよまをていよと
海まをていよと
よはれあまいよ今
よのよまをていよ
いよまをていよと
大細えよまをていよ
文正られよまをていよ

しよまをていよ
ともりりよまをていよ
あまをていよ
水蔵百いよまをていよ
いよまをていよ
まをていよ
大細えよまをていよ
文正られよまをていよ

Handwritten text in Arabic script, oriented vertically on the right page of an open manuscript. The text is arranged in several lines, with the rightmost line being the longest and most prominent. The script is cursive and appears to be a form of Maghrebi or Andalusian Arabic. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The lines of text are roughly parallel to each other, following the curve of the page. The overall appearance is that of a historical document or a page from an old book.



